

## メッセージアウトライン

### 創世記 3:6 ~13 「人間の墮落」

[6]「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのによく、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた」

彼女にとってその木は、①「食べるのによく」…肉体的に食欲をそそるものであり、②「目に慕わしく」…感情、美的感覚に訴え、③「賢くする」…知的、靈的誇りに訴えるものであった。それで彼女はその木の実を取って食べた。しかし、彼女は先に神が言われたような死ぬこともなく害を受けることもなかったもので、それをいっしょにいた夫にも与え、彼もそれを食べた。他の動物が持ってきたのならば用心したかもしれないが、それが先に食べた妻から与えられたものであったので彼もその実を食べた。これは小さな変化、小さな不従順のようであるが、そうではなかった。

[7]「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」

「目は開かれ」とは彼らが肉体的に盲目であったが、目が見えるようになったということではない。罪を知らず、神を信頼することから来る無邪気で純真な思いに替わって、恥と罪の中にあることを自覚するようになったということである。彼らは鋭い裸意識を持つようになった。彼らはお互いから、また、神から自分の裸をおおうために、いちじくの葉をつづり合わせて腰をおおった。しかし、このような腰のおおいでは神に対する反逆の罪を隠すことはできない。同じように私たちの義も不潔な着物のようであり、自分の罪を隠すのに役立っていないことを覚えておかなければならない。→イザヤ 64:6 私たちは自分で作ったり、達成したことによっては神のさばきを免れることはできない。

[8-10]「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。『あなたはどこにいるのか。』彼は答えた。『私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。』」

おそらく神は人と会って交わる時を日々持つておられたのかもしれない。しかし、それがどのような現れであったかはわからない。喜びと楽しみの時であったこの神との交わりを彼らは避け、さらに身を隠した。神が人に呼びかけられた時、人は神から隠れることができないことを知り、裸なので恐れて隠れたと言いつににならない返事をした。

神への不従順は彼らに罪と恥の意識をもたらし、やがて生まれてくる彼らのすべての子孫（全人類）もそれを受け継ぐものとなるのである。サタンは「あなたがたは決して死なない。あなたがたの目が開け、神のようになる」(3:4~5)と言ったがそれは全くの嘘であった。このサタンの嘘は今日に至るまで人間を惑わし続けている。

[11-13]「すると、仰せになった。『あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。』人は言った。『あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。』そこで、神である主は女に仰せられた。『あなたはいったいなんということをしたのか。』女は答えた。『蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。』」

人が自分は裸であることを神に告げたとき、彼は自分が神の戒めを破り、罪を犯したことをさらけ出したことになる。なぜなら、もし彼が罪を犯していなかったならば彼は罪の意識を持たず、裸のゆえに神から隠れる必要もなかったからである。それゆえ神はすぐに彼に禁断の木の実を食べたかどうかを問いただした。しかし、これは彼が自分の罪を告白し、赦しをこう機会でもあった。もし彼が自分の罪を告白し悔い改めたならば、この後の事態の展開は変わっていたかもしれない。しかし、彼はそうしなかった。逆に彼はその責任を「あなたが私のそばに置かれたこの女が…」と女だけでなく神に転嫁しようとする。神は同じく、女へ問いかけられたが、女は「蛇が私を惑わしたのです…」と蛇(サタン)に責任転嫁する。

このように自分の罪を認めながら、それを正当化しようとする性質はこのあとのすべての人間に引き継がれていくことになる。ここにも神のようになろうとした人間の罪の恐ろしい性質が現れている。罪の結果を恐れるだけの心情は悔い改めではない。→イスカリオテのユダの例(マタイ 27:3~5) それゆえ、神は罪の結果としてのさばきを人に告げられることとなる。しかし、それは絶対的な永遠の滅びと呪いの宣告ではなく、神の恵みによる救いの御計画も含まれたものとなるのである。→3:14 節以下

罪の告白→ I ヨハネ 7~10